「杜に想ふ」（神社新報）　平成26年7月7日

杜に想ふ

地元愛

山谷えり子

夏越の祓ひで茅の輪をくぐり、迎へた七月は夏祭りの季節である。

博多祇園山笠、厳島神社の管弦祭、那智の火祭、京都祇園祭、会津田島祇園祭、大阪天満宮の天神祭、相馬野馬追祭、真鶴の貴船まつり、阿蘇神社の御田祭……、各地の国会議員たちは、永田町にそれぞれの活気を持ち込んできてくれてゐる。

「まつり」の語源は、神様に奉仕する〝まつらふ〟といふ言葉に由来し、〝待つ〟といふ音を含むやうに、人々は誠をつくし、お供へ物を捧げ神恩に感謝し、喜びを分かち合ってきた。子供らは綿あめを求め、金魚すくひをしながらも、神社の賑はひが境内に集まってゐる人々だけでなく、先祖の力によって支へられてゐることを敏感な感覚で嗅ぎとってゐるやうに思ふ。私自身も、氏神様の祭りの季節は落ち着かず、時に学校を早退してまっしぐらに神社に走る小学生であった。まつりは土地の声を聞き、身体感覚をよみがへらせ、共同体の祈りに生命を吹きこみなほすことを、日本人は魂の奥深くで知ってゐる。

わが家の末娘も〝まつり〟をいとほしむ子で、先日も私に「熊野市の〝二木島祭〟は勇壮な船漕ぎ祭りだけれど、平成二十二年を最後におこなはれなくなってしまったの」と語りかけてきた。捕鯨の浦として知られる二木島祭は、阿古師神社と室古神社の例大祭で、祭りに先立って指名された人は、祭りの当日まで朝夕二回浜で塩垢離をとり、食事制限をして清めの日々を過ごすといふ。

このところ、私は、出羽三山神社の羽黒山参籠所に泊まり、村のしし踊りの場に身を置かせていただいたり、柳田国男の「遠野物語」を手に早池峰神社の風を浴び、また、高千穂神楽の神祕に心奪はれたりと、三千年の時間を生かされてゐる心地の中にあるので、娘と共に各地の祭りの継承のため祈りを捧げた。

平成五十二年には、八百九十六の自治体が消滅する可能性があるといふ調査が「日本創生会議」（座長・増田寛也元総務相）から出され、今、政治の場に激震が走ってゐる。山村だけでなく、東京の豊島区や大阪の浪速区、中央区などの都心部も含まれてをり、全国千八百自治体の約半数で出産適齢期にあたる二十～三十九歳以下の女性人口が五割を下回るため自治体が消滅する可能性があるといふ分析である。出産適齢期にあたる男女の仕事や年収を安定させることに政治、行政は力を集中させねばならない。また、土地の光、祈りが若者の身体にしみこみ、共同体継承の源流ともなる祭りの力の見直しも社会全体で起きてほしい。

私自身は、出産・育児を親や祖父母への〝恩返し〟ととらへてゐた。まつりで育てられた地元愛がその根源であったことをもったいなく感じてゐる。政府は「地方創生本部」を設置することとした。期待したい。

（参議院議員、神道政治連盟国会議員懇談会副幹事長）